Washington Women's Dialogue

日本人女性がワシントンの医療先端研究分野で活躍している。今回ご紹介する武部直子さんは、医療の分野で最先端の研究や治療を行っている世界でもトップレベルに位置する米国立衛生研究所（National Institutes of Health: NIH）に勤務されています。米国立衛生研究所には２７の施設があり、その中の国立がんセンター（National Cancer Institute）にて、臨床医として新しいがんの薬の研究やがんの治療に携わっていらっしゃいます。これまで、どのような選択をされて現在のキャリアに行きついたのか、詳しくお話をお伺いしました。

武部 直子さん
米国立衛生研究所、国立がんセンター開発治療外来副部長、早期臨床治験開発プログラム、トランスレーショナルサイエンス・セクション・ヘッド

10年間勤めたNIH国立がんセンターがん治療評価部門(CTEP)から、同センターの開発治療外来(Developmental Therapeutics Clinic)の副部長、早期臨床治験開発プログラム、トランスレーショナルサイエンス・セクション・ヘッドとして2017年6月に異動。CTEP在籍中は、がんの早期薬剤開発のため産官学連携のもとで全米の大学医学がんセンター臨床治験を統括。
NIH国立がんセンター以前は1999年よりメリーランド大学医学部血液腫瘍内科及び病理学科のアシスタントプロフェッサー、骨髄移植部門のアテンディングフィジシャン、がん実験治療学のラボの主任研究者。多発性骨髄腫の薬剤開発研究、臍帯血ステムセルの体外増殖、臍帯血ステムセル同種移植などの研究を行っていた。

1988年に弘前大学医学部を卒業、日本で3年間の臨床研修の後、1991年に渡米。サンフランシスコのUCSF関連病院であるCalifornia Pacific Medical Centerで内科レジデントを行い、ニューヨークのメモリアルスローンケタリングがんセンターの血液腫瘍内科フェロー、分子薬学治療学部門で遺伝子治療の研究をポスドク時代に行った。
現在NCI Precision Medicine Initiativesの一つである “Exceptional Responder Initiative”ならびに “NCI-MATCH”のインベスティーターを勤め、NCIプロボカティブ・クエスチョンチーム、キャンサームーンショットの“ヒト腫瘍アトラス”のプロジェクトメンバー。Elsevier出版社のジャーナル、”Current Problems in Cancer”のアソシエートエディター。日本のがん免疫治療ガイダンスワーキンググループの海外アドバイザー。米国内科専門医、血液学科及び腫瘍学科専門医。

ーー今のお仕事の内容を教えてください。

現在は、承認されたお薬で治らないがん患者さんを対象に、前例のない方法で、安全かつ効果が期待される治療法をデザインし、バイオマーカーを駆使しながら薬の開発していく仕事をしています。

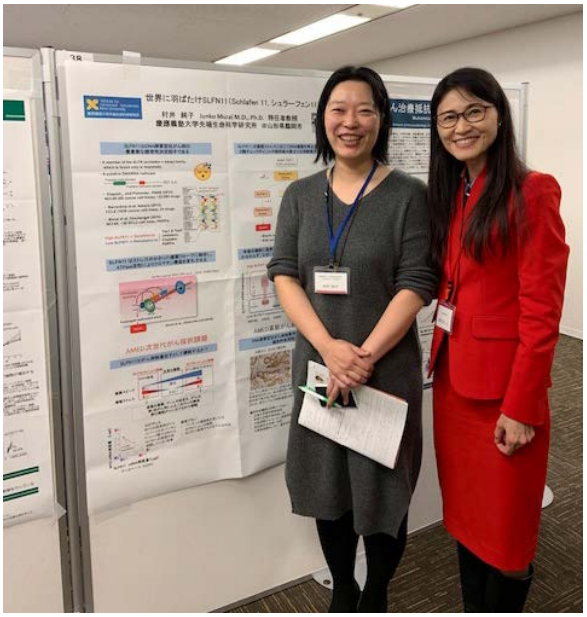
ーーアメリカでお仕事されて長いとのことですが、元々ご出身はどちらですか？

北海道札幌市出身です。父は医者で母は英語とピアノの先生でした。10歳の時に、父がオレゴン大学で客員助教授となり、一年間家族でポートランドへ移り住みました。小学校4年生の１年間を現地で過ごしました。帰国して札幌に戻り、小学生の頃は習い事もしていましたが、毎日真っ黒になって遊んでばかりいました。中学生になって急に読書に目覚め、学校と家と図書館を往復する生活になりました。そして、父が弘前大学の教授として移ったのをきっかけに、14歳の時に弘前へ移りました。

Japan Institute for Social Innovation and Entrepreneurship (JSIE)はワシントンDC登録の503c3非営利団体です。JSIE主催のWashington Women’s Dialogueでは、自分らしくグローバルに活躍する人を応援します。詳しくはこちら。 www.jsie.net

ーー医学の道に進もうと思われたのは？

弘前高校時代に関心が高かったのは語学、歴史、文学、哲学で、国際法や医学にも多少関心を持っていました。理科学系を勉強したのは医学部にいくためでした。男女雇用均等法の前でしたから、高校生ながら「手に職」を付けなければと考えたときに、医者か弁護士かなと思っていました。
医学を選んだのは、母方の祖母が京都の外科医の娘で、なりたくてもなれなかったという思いを聞いていたので、その影響もあるかもしれません。
弘前大学医学部に進みましたが、父が教授を務めていたのでやりにくかった。卒業してから、授業で「お前の父親にチョークなげられた」など言われたりして。
医学部最終学年の時、姉妹校であるテネシー大学へ交換留学しました。4週間の期間でしたが、あまりにも日本とやり方の違いにショックを受けました。日本だったら患者さんに触らせてもらえないのに、ここでは外国人学生の私にも患者さんの処置をさせてもらえたのです。
「ここでは見て覚えて、自分でやって、そして次は人に教える、その3段階だよ」と、テンポがすごく早い。このテンポで研修をすれば、早くいい医者になれるのではないか、と思いました。
特に小児の白血病の治療などで有名なセント・ジュードホスピタルには衝撃を受けました。ALLという白血病があるのですが、そこで治療を受けると90％治り、白血病が治療で98%が消滅するというすごい数字を出したところです。そこに行って自分は「がんをやるしかない」と思ったのです。



日本出張の際ポスターの前で

ーーアメリカへ行くと決めたんですね？

日本に帰ってきてから、どうやったらアメリカに行けるかいろいろ模索しました。そのころ横須賀の海軍病院で日本人のインターンを受け入れていて、お金をもらえる英語学校だと思って1年間行きました（笑）。

患者もアメリカ人、スタッフもアメリカ人、すべてアメリカンスタイルの病院。ただ、アメリカに行くには、アメリカの医師免許を取らなくてはならず、3段階の試験をすべて合格しなければいけない。その前に日本の医学制度も経験しなくてはと思い、慶應大学医学部の医局に入り内科研修をしました。
1980年代、日本はがん治療についてはアメリカより10年くらい遅れていました。米国では一人の患者さんに対しどう治療するかチームで議論するのが当たり前でしたが、日本は硬直的で他の先生は教えてくれず情報が少ない中自分で決断するしかないやり方に疑問を覚えたこともあります。横須賀時代に出会い、後に結婚する主人もアメリカでの医師への道を応援してくれました。

その後アメリカの医者免許を無事取得し、カルフォルニア大学サンフランシスコ校の関連病院で３年間の内科レジデントを経て、NYのメモリアル病院で固形がん、並びに血液がん専門のクリニカル・フェローシップと、それに平行して研究室のポスドクとしてもさらに5年研修しました。ポスドクでは遺伝子治療の研究をやりながら、がん専門医の資格も取りました。当時、テネシー州で受けた衝撃から血液がんに魅了されていたので、自分がやりたいことは骨髄移植だ、と思い骨髄移植の専門医となり、メリーランド大学の助教授となります。現在のがんセンターにくるきっかけは、友人からNCIは面白いよ、と誘われて軽い気持ちで履歴書を出してみたら、突然電話がかかってきて「面接にこないか」といわれたことです。実験医学もわかり臨床もできる人材を探していると言われ、そこで骨髄移植をすてて、それまでとは全然違う分野、抗がん剤の開発に飛び込むことになりました。

ーーもちろん、いろいろアメリカの地で経験され、苦労されたり戸惑ったりされたこともあると思います。失敗から学んだ教訓はありますか？

アメリカでも医者の80％が外国人です。日本人だからといって自分だけが特別じゃない。ただ、最初は議論に加わることが難しかった。

発言しないと、意見がないと思われて、そのプロジェクトが他の人に移ってしまった事も。自分がやりたいことがあったら、皆の前で「私これやりたい」と手を挙げることが大事。誰かが誘ってくれるかもと待っていたら一生仕事はきません。

ーーお仕事をしていて楽しいこと、やりがいは何ですか？

まだ存在しないものをつくること。ヒトに対して初めて使う薬を安全に、かつ薬の機序を解明するための研究を同時に行いながら、治療することを考えプレゼンテーションします。企画が通るとお金がついて、そして実際にプロトコールを実施して患者さんを治療する。それで患者さんがよくなれば最高にうれしい。がんの治療は難しいので、なかなかそういうことはないですが、やはり仕事をしている時が楽しいですね。日本の場合は、例えば白い巨塔なんかを見ると、教授を頂点に階層的になっていて、スタッフの考えが取り入れられることはまずありません。アメリカの場合はスタッフでも意見を言い、自分の治療や研究をすることができる。私は、人に命じられて仕事を行うのが苦手で、突き動かされる好奇心で仕事をするのが一番気持ちよく、そして粘強さが強みなので、日本よりアメリカの方が合っていると思いました。

世界中の医師の皆さんとオーケストラの海外公演～イスラエル公演で、スイス人のスタンドパートナーと

ハンブルグのエルプフィルハーモニーで演奏している様子

ーーお二人のお子さんと一緒にバイオリンを演奏されるそうですね？

親子で弾けたらいいなと思って小さい頃から子供にバイオリンを勧めました。子供が小さい時は、私も一緒に子供たちとコンサートで演奏していましたが、今はとっくに追い越されました。現在は、医師達が組織したチャリティ・オーケストラのメンバーとして、海外公演もしています。自分で音楽を楽しみながらその国の人たちと交流し、地域に貢献したり、また音楽を通じて世界中の医師の皆さんと、学会や仕事とは質の違う交流ができることがとても新鮮です。私にとって仕事は“Passion”ですが、音楽は“Love”、そして良い仕事をするために大事な栄養となっています。

——今後ますますご活躍をお祈りしております。バイオリニストのお二人のお子さんの将来も楽しみです。

このインタビュー記事の内容はさくら新聞2019年5月号に記載されました。

www.jsie.net
Japan Institute for Social Innovation and Entrepreneurship

JSIE
Japan Institute for Social Innovation and Entrepreneurship